


 乳鉢

## ちりめんさんしょ



速見郡杵築市医師会 福永良和

「ちりめん」とは絹織物の一種。布面に細かなしじら縮みがある。経糸によりのない生糸、緯糸によりの強い生糸を使って平織りにし、ソーダをまぜた石鹼液で数時間煮沸して縮ませ、水洗いして糊気を取り除き、乾燥させて仕上げたもの、衣服、帯地、裏地、風呂敷などに用いられる。(以上、日本国語大辞典巻9より)と、ちりめんの由来を調べてみたのだが。小生のそれは縮緬雑魚(ちりめんじゃこ)の方である。縮緬雑魚の保存食の一種のちりめん山椒のことである。小生がちりめん山椒を作り始めて、かれこれ15年になる。きっかけは患者さんから頂く大量の釜揚げシラスである。杵築の守江湾は別府湾につながり縮緬雑魚の良い漁場である。釜揚げシラスは漁期が決まっているため、頂く時期も集中してくるのである。最初のうちは大根おろしにかぼすをしぼって食べると最高においしいのであったが、かくも大量になると食べるのにも限度がある。

そこでこの大量のシラスをどうするか考えたあげくの結果がちりめん山椒である。製造工程は冷凍しておいた釜揚げシラスを解凍してちりめんじゃこの状態にすることから始まる。山椒もこの日のために下処理した上で冷凍しておいた物を使うのである。ここで断っておかなければならないのは、おそらく読者諸氏のご存知のそれとはいささか違うものであるということである。いわば、山椒風味の強いちりめんじゃこの佃煮と呼ぶ方が想像しやすいのではないかと思う。

甘辛く味付けしたちりめん山椒がからみピリリとパンチの効いた香りが鼻腔を通り抜ける感覚は実に爽快な味わい深いものである。まさに大人の食べ物である。酒の肴にも炊きたてのご飯の上に乗っけても最高である。出来上がったちりめん山椒は小分けして従業員や全国の知人友人親類縁者に送ることになる。

年に1-2回の製作なので毎年これの恩恵(災難?)に浴せる人間は限られるが。メールやはがき、電話で感想を聞かせてくれるのが楽しみであり、作りがよいという物である。ちりめんついでに辞典によると縮緬医者というのがあり、これこそは小生のことか(ちりめん山椒作りにつつつをぬかす医者)と思ってよく読むと、縮緬医者とは縮緬などの美しい衣服をまとっているところからはやっている医者、世評の高い医者とある。とんだ勘違いであった。以上、縮緬医者ならぬちりめん山椒医者の一席であった。

リレー  
乳鉢

## 私とゴルフ



速見郡杵築市医師会 栗山和文

私は、安岐町の国東市民病院で産婦人科医として10年間勤務し、平成17年より杵築市内に開業し、今年で10年目になりました。開業してからの10年間は、産科医の宿命と思っておりますが、365日何時お産や急患で呼ばれてもいい様に、遠出の旅等は一度もありません。幸いすべての出産に立ち会い、赤ちゃんを取り上げることができました。

さて、私はゴルフを始めて約30年近くなりますが、今でもとても好きなスポーツの一つです。なぜゴルフが好きかと言うと、自分のボールは自分しか打てない、つまりすべては自己責任で処理をしなければならない、そういう精神が、産科医である私の生き方に共通しているものを感じるからです。大自然の中でプレーができ、お産での疲れやストレスを解消してくれる魅力のあるスポーツなのです。

幸い、杵築市内には、住吉浜リゾートパークというレジャー施設があり、その中に、こじんまりとしたゴルフ場があります。ほぼ同じ場所の9ホールを2回まわってパー72となる（ただし、各ホールごとにティーアップとグリーンは2ヶ所ずつあります）ゴルフ場です。自分でカートを引きながらプレーするのですが、一人でもプレー（おひとりさまゴルフ）が可能であり、私にとってとても便利なゴルフ場です。私の医院から車で10分程のところであり、いつお産で呼び戻されてもすぐに対応ができ、安心してゴルフもできるのです。

そこで、開業して10年目にはいった今、大きな目標を立てることにしました。それは住吉浜ゴルフ場のシングルをめざす事です。週にハーフを2回ラウンドしていますが、なかなか上達せず、住吉シングルはまだ見えてきません。それでもいつかきっと産科医と住吉シングルの両立を達成したいと思っています。




## 開院記念日

国東市医師会 菅 淳 一

医師会会報に投稿するのはちょうど20年ぶりとなる。第475号(平成6年4月10日発行)の勤務医コーナーに『春の落ち葉』という題で載せて頂いた。

当時は東国東広域国保総合病院(現 国東市民病院)に透析科医として勤務していた。故 初井真美院長, 故 加茂成人副院長のご支援をいただいて, 平成19年10月まで透析科部長として60名の透析患者さんを相手に孤軍奮闘していた。既に, 病院の近くに自宅も建て, 開業など夢にも思っていなかった。

もちろん, 盆も正月も無い生活を送っていた。

当時, 病院に勤務していた仲間が, 一人また一人と開業していった。中でも, 一番のゴルフ仲間でもあり勝負相手でもあるK先生が病院を去って行った時は, 一抹の寂しさを覚えるとともに, 開業医生活にある種の憧れを抱かせてくれた。それから, 彼に「手ほどき」を受けながら, 勤務の傍ら開業準備を進めていった。平成19年11月3日文化の日を目出たく開院記念日を迎えた。人工透析内科を中心とした開業のため「祝日」も診療する。現在も祝日は人工透析とともに午前中外来診療を行っている。無事に7年間が経過し, 今年も8回目の開院記念日を迎えようとしている。

さて, 記念日ともなると何か行事をやらねばなるまいと頭を捻る事になった。透析ベッド10床の小さなクリニックで出来る事は? 分相応な記念日行事は?

これがなかなか難しい。大きな病院のように病院祭を開く訳にもいかない。開いたところで閑古鳥が予想された。たどり着いた結論が, 院内広報誌を作成する事と記念品をお配りする事である。

目出たい日の記念品を何にするか, 思案の結句は「紅白饅頭」であった。その昔, 結婚式の引き出物によく使われていた, あれである。高齢の方には喜ばれるが, 喉を詰まらせると困ってしまう。糖尿病が多い透析患者さんにもやや不向きか。あれこれ心配の種はあるが, 目出たい品という事でお許し頂いている。1年間を無事に過ごされた患者さんと我々クリニックのお祝いである事に免じて。お世話をしている透析患者さんが元気に1年間を過ごされるよう, そして, 皆さん健やかに記念日が迎えられるよう, 職員一同念じながらお渡ししている。もちろん, 当院も無事に1年が過ごせるよう祈念しながらである事は言うまでもない。

リレー  
乳鉢

## 還暦ブルー

大分東医師会 長 松 宜 哉

10月で60歳になった。還暦である。家族全員に祝ってもらい、ここまで無事に人生を過ごしてこられたことに感謝した。多くの先輩方がいろいろな思いで迎えたであろう還暦。私にとっても特別な思いがあった。

私の父は63歳で亡くなった。私が34歳の時である。悪性リンパ腫だった。発症は62歳。1年間の闘病の末最後まで男らしく逝ったと当時の病院の職員から聞かされた。最後に看取ったのは私自身だった。

周囲の人は当然、父の死をまだ早い、もったいないと悔やんでくれた。私は肉親が早く亡くなったことに対して、自分の将来を重ねることしかできなかった。たぶん働き盛りの年齢で父の死に直面したからだろう。人生設計は60歳まで。それで一区切り。60過ぎてすぐ死ぬかもしれないから、その後の人生はそこから考える。いや父が亡くなった63歳までは考えられない。

そういう思いを心の奥に刻んでしまった私は50歳を迎えるころ、あと10年余りしか時間がないと思っていた。10年余りで自分は何をすればいいのだろう。何ができるのだろう。そんなときに大分市と佐賀関町の合併問題、町立病院の民営化問題が発生した。この問題にかかわるのは多分運命だとその当時感じていた。それから仲間たちと一緒にがむしゃらに頑張っただけで今に至った。10年間、あっという間に60歳というゴールに達してしまった。

それでも昨年あたりからゴールの60歳を多分皆さん以上に意識してきたと思う。まず自身の健康状態、法人経営の中でのけじめと継承、今後の自分の生き方等々、考えるとだんだん気分が落ち込んできた。還暦というゴールは普段通りの早さですぎ去っていくのにけじめをつけたいという現実は毎日の忙しさの中で埋もれてしまう。ゆっくり考え、計画を立てる時間がない。気が焦る。

そんななかで少し開き直りの気持ちも出てきた。還暦をけじめと考えるのは今の世の中、少数だろう。みんなまだ元気で働いている。ただ大病さえしなければいいのだ。自分も大丈夫だ。多忙な中でそんな葛藤を繰り返しながら、60歳もあっという間に過ぎていくのだろう。

来年になれば、61歳の新しいスタートだ。いつまで生きていけるかわからないが、一日一日を大事に過ごしていればそれでいい。これを書いている間に誕生日を迎え、あわただしく過ぎていった。何も変わらなかった。1歳年をとっただけだった。



## 「Unlearnの19か月」



豊後大野市医師会 坪山明寛

祖母山を遠望し、診療所横の園児の歓声を聴き、診察室のメダカを眺め過ごして19か月が過ぎた。医師となり41年の歳月を積み、病院管理職として経営・医師確保に奔走して17年を経た後に、平成25年4月から社会医療法人関愛会清川診療所に勤務を始めた。

同僚医師のいない一人勤務医で働くことに一抹の不安はあったが、まあいろんなことを耳聞してきたから何とかなるだろうと思った。

しかしひと言で言えば「大変だった」というのが真実だ。引継ぎした患者さんに使用されているジェネリック医薬品は、全くと言うほど知らなかった。日々「今日の治療薬」と首っ引きであった。受診される患者さんは、高血圧、高脂血症などの慢性疾患が大半であり、対応には困らなかつた。しかし整形外科疾患（骨折、腰部脊柱管狭窄症など）と外傷（擦過傷、刺傷、切傷）火傷、鶏眼等の飛び込みには難渋した。知識としては持っていたが、実際に診断し加療するのは初めてのことが多かった。患者さんは、経験豊富な医師と思ってくれているのが辛かった。

それから始まった、学びが。夏井先生の外傷処置、ハリソン内科学、神経診断法・・・と。医学生に戻っての再学習(relearn)が。これはある程度スムーズにいった、経験があることが理解を早めてくれたのだ。

疾患内容や加療の方針（検査、薬剤など）の説明には、専門知識やガイドラインを金科玉条的に行うことなく、患者さんや家族の方々の考え方を聴き、柔軟に対応するよう心をください。そうしないと患者さんの性格や数十年に渡って築いてこられた生活の在り方や考え方、あるいは人生までを否定することになりそうな畏れを感じた。医学的に正しいと考えられる情報はしっかり学んだ上で、知識や情報をいったん学びほぐし、患者さんを「生活人」として接し、最も無理のない相応しい臨床判断に努める毎日であった。このように退職後の診療所での19か月は、鶴見俊輔氏の言われる「unlearn(学びほぐし)」の重要性を感じながらの日々であり、医師としての新しい世界を体験でき愉快であった。

リレー  
乳鉢

## 「JCと地域医療」

中津市医師会 甲斐誠司

青年会議所(いわゆるJC)ってご存知でしょうか? JCとは、「明るい豊かな社会」の実現を理想とし、20歳から40歳までの責任感と情熱を持った青年有志が、共に向上し合い、社会に貢献しようという理念のもと組織された団体です。

私は義父の勧めもあり、里帰りした昨年より中津JCに入会しました。入会当初、「君が代」やJCソングを直立不動で声高らかに歌い、軍隊のような規律正しい例会に参加した際には、「ヤバい組織に入ってしまったな・・・」とドン引きしてしまったのが第一印象でした。

しかし、医師としての存在を離れての活動は、新鮮なものでもありました。炎天下で駐車場係のため3時間立ちっ放しのこともありましたし、1,000人以上が参加した水害後の山国川清掃活動に参加したこともありました(もちろん救護係でした)。お約束ですが、毎回イベントの後には体育会系の部活を彷彿とさせる飲み会があり、翌日の外来に差支えないか心配になることも多々ありました。そんなJC活動ですが、このように共に活動を一生懸命頑張り、一方で笑い語り合うことで、職種を超えた同志との掛け替えのない出会いを得ることができ、入会してよかったと思っています。

さて、私は自治医科大学出身ということもあり、「地域医療」という言葉を大切にしつつも、その本質は何かわからないでいたような気がします。しかし、JC活動を通じてわかってきたことがあります。我々は医師という職業のもとで医療活動をしているだけであり、その地域の一つの社会的存在に過ぎません。ですから地域医療とは、その地域社会への貢献・奉仕を、医療という仕事を通じて行うことそのものではないだろうか、ということです。僻地診療所から高次機能病院まで、病院の規模は様々ですが、大切なことはその精神ではないかと感じています。

私は、医師になる頃はドクターコトーのような僻地のスーパードクターを夢見ていました。しかし現在は違います。もちろん身の程がわかってきた部分もありますが、いまの立ち位置でも考え次第で立派な「地域医療」が提供できるはずだとわかってきたからです。中津は生まれ育った土地ではありませんが、地域の人々と触れ合う中で日々愛着も湧いてきています。今までは総合内科医として、病気を診るのではなく、患者全体を診ることを大切にしてきましたが、これからはその先にあるこの地域を癒してあげられる様、日々精進すべきと考える今日この頃です。

# 乳鉢



## 7月1日防災の日に振り返る

速見郡杵築市医師会 大野 繁 樹

平成7年1月17日午前5時46分、何気なく目が覚めた。なぜ目が覚めたかを考える暇もなく地震が始まった。後で聞けば当時の基準で震度7、時間にして11秒だったとのことなので大地震だが、「割と強くてやたら長い」としか思わなかった。布団に潜って手で頭を守り、揺れが収まったので寝なおそうと布団から顔を出したところ、母親が緊迫した声で「大丈夫？」と聞いている。「大げさな」と思った瞬間、辺りが土臭いのに気付き、初めて「もしかしたら大変な事かもしれない」と思い直す。布団から飛び出すと、家族雑魚寝の寝室の南では縁側との境にある障子が倒れている。寝室の土壁の上の方もはがれて、布団の足元にその壁の一部が落ちている。何よりも先に自室に置いてある自分の大切なものを取りに行こうとするが、落ちた壁が邪魔で自室の方向には進めない。母親は居間に通帳を取りに行こうとしている。一足先に動いた経験から他の部屋には行けないことがわかっているので、「通帳より先に外に出たほうがいい！」と言い縁側の東につながっている玄関を目指す。しかし、玄関も物が倒れていて、玄関の中にも入ることができない。幸い縁側の南側のガラス戸が倒れて開いているので、そこから庭に出る。ガラス戸の破片か、屋根から落ちた瓦か判別できないものが散乱しているが靴もないのでそのまま外に出る。門までには障害物はない。外の道に出ると自宅も周りの家もところどころ塀が倒れて道に落ちている。ちぎれた電線が垂れ下がっている。通れないほどではない。恐らく電気は通っていないだろうが、電線に触らないように、出来るだけ物が落ちていなさそうな地面を選んで、ほとんど真っ暗な中を、自宅から100mの中学校まで、いつも登校に使うのとは違う道を走る。周りの家からも人が出てきて同じように逃げている。中学のグラウンドに着いてからどれぐらいの時間、何をしていたのか覚えていない。少し離れたところで火の手が上がっていた。その辺りに住んでいる同級生たちもいたが、みんな無事に逃げているだろうと思った。薄く明るくなる中、「今日提出期限の社会の宿題、まだやってなかったけど、もう出さなくていいな」と思った。結局中学から見えた火事の辺りに住んでいた同級生1人を含め、2人の同級生が亡くなっていた。あの日亡くなった2人の同級生と自分のどこに違いがあったのか、今でもふと考えることがある。



## なだ 奈多，奈多八幡宮のこと。

速見郡杵築市医師会 徳丸 勲

空港道路の終点安岐塩屋，右折すると私が住んでいる奈多である。国道213号線に沿って，東側は奈多海岸，西側は見立山の山裾に開けたのどかな集落である。美しい白砂青松の海岸は，古くから砂鉄の産地であり，製鉄で豊富な財を生み出し，この地方の文化を大いに推進していた。この松林の中に奈多八幡宮がある。境内地の広さは8町7反余，約2000本の松の木が植えられている。天平元年(729年)の創祀。宇佐八幡宮の末宮として分霊を祀った。宇佐公基が初代宮司で，奈多公基と改め，以後代々の宮司は奈多氏を称した。宇佐宮創祀の5年後であった。奈多宮沖に浮かぶ市杵島は，宇佐宮，奈多宮の御祭神の一柱である比売大神発祥霊地として崇敬されている。奈多宮の全盛は平安時代から鎌倉時代にかけてと思われる，今日，宮に残っている宝物が当時の隆盛を物語っている。古くより宇佐宮から奈多宮への行幸会が4年に1度のちに6年に1度行われた。国家的行事で宇佐宮の旧神像が，比売大神を元宮とする奈多宮へ還幸される行幸で，納められていた。しかし細川忠興の時を最後に途絶，その復興が望まれている。戦国時代になると，奈多宮宮司奈多鑑基あきもとは奈多城を築き，延暦寺が僧兵をかかえたように，神兵を養い，自国を守ったのである。そして豊富な財力で領主大友氏に接近し，その寺社奉行になり，さらに次男は大友家側近第1の重臣に，娘は宗麟の正室にまでなったのである。奈多鑑基なる宮司，相当な人物であったろう。(このくだりは以前テレビドラマで放映されたことがあった。)豊臣秀吉の代になって社領を没収されて，奈多氏滅亡した。実に初代奈多公基より830余年，奈多氏はこの神社に仕え護ってきたのであった。

以後，細川，小笠原，松平藩の崇敬を受け，戦乱や津波等で破損していたのを，中津城主細川忠興が寛永4年(1627年)新しく建立，現在の社殿などは明治14～15年に造営されたものであるが，寛永の頃の姿をおおむね留めている。ふだん参拝する人は少なく，別府湾をのぞむ松林の中にしずかに鎮座している。ふと，ふるさとの古きよき時代に思いを馳せた次第である。

# 乳鉢



## 「入れ歯の話」

佐伯市医師会 松下 哲一郎

傘寿を過ぎると、急に上下の歯の数が心細くなり始め、ついに最近「総入れ歯」になりつつある。甥の歯科医に無理難題を持ちかけたが、結論としてインプラント以外に解決の術は無いと云う事になった。これでも40年前は上下に立派な歯が揃っていて、健啖振りを誇っていたものである。そんな40年程も昔のお話です。

ある日、心易い近所のお婆さんが診察にみえて「最近、上の入れ歯を失くしてどこを探しても見つからないので、仕方なしに歯医者さんに新しい入れ歯を造って貰ったら、どうも胃の具合が悪くて飯が食べんのじゃが」と云う事で、早速当時もてはやされておったレントゲンの二重造影法で胃の透視を行う事となった。粘膜像の撮影の後、充満像を見たとき、胃の幽門部に見事な「入れ歯」が写っていた。つまり、間違いなく「入れ歯」は失くしたのではなく、呑み込んでいたのである。

「お婆さん、入れ歯は失くしたんじゃないのうて飲み込んだんじゃないか」と写真を見せて説明しても「そんな筈はねえ、第一あんな大きな物を呑み込める訳がねえ。」私は少々慌てたが、特別な異常も、大きな苦痛もないし、後はどうなるか、取り敢えず経過を見る事にして、異常が無かったら4、5日後にもう一度レントゲンで「入れ歯」が幽門を超えるかどうかしらべる事にした。再透視の結果「入れ歯」は胃の中には見当たらず、無事幽門を抜けて腸の方に送られている事を確認できた。あとは運を天に任せて見守る他はないと思った。その後もお婆さんは、よく食べよく排泄して過ごしていたらしい。

その後、そろそろその事も忘れかけていたところ、久し振りにみえたお婆さんは、今度は、「お尻の奥の方が痛い」と訴えてきた。

さてはと思って、おそろおそろ肛門に指を入れて見ると、明らかに「入れ歯」の一部が顔をのぞかせていた。難無く引き出された「入れ歯」を見たお婆さんは、憮然として、「そんな筈はねえ・・・」「信じられん・・・」の一点張りで、あっけにとられている家族や私達を後に、元気に帰って行きました。

胃の内視鏡もまだ普及してなかった、古い昔の事です。元気だったお婆さんも、もうとっくに逝ってしまいました。

今では、一人の患者さんの思い出として私の記憶にだけ残ってお話です。

# 乳鉢



## 「人生の道場」

佐伯市医師会 島村 康一郎

「若いうちの苦勞は買ってでもせよ」この若いうちとは何歳までを指しているのだろうか、一人の人間としていつまで成長し続けたいのだろうか…

耳鼻咽喉科医院を佐伯市に開業して15年になろうとしている。開業当初ある先輩医師から「地域医療に貢献するとは単に自院で診療することではないよ、その地域の医師会活動をして初めて貢献していると言えるのだよ」と教わった。また他の先輩からは「医者はお自分の城を持つと忙しさのあまり外部と交流を持たなくなりがちだ、人間形成のためにも世間を広くする必要があるよ」とロータリークラブを紹介された。

佐伯ロータリークラブでは会長や幹事もさせて戴いた。人生について多くを考えさせられ、人との出会いやつながりの大切さを教わった。周囲への気配りやサービス精神を磨くことで、職業や家庭に役立つことも度々あると実感している。他業種の仲間との交流は地域内にとどまらず他県や他国にもおよびとても楽しいものとなった。「入りて学び、出でて奉仕せよ」「もっとも奉仕するものに、もっとも恩恵あり」がそのモットーであり、後者は自分の座右の銘である「陰徳陽報」にも通じる。現在も修行中であるが、学んだことを今後さらに実践して行ければと思っている。

5年前から大分大学医学部硬式庭球部のOB会長を拝命している。テニス部は毎年10名前後の部員が入り現在までに約300人を輩出、OB会としては医学部一の大所帯となっている。産婦人科の楢原教授をはじめ多数のドクターが県下で活躍している。OB会長に就任後、以前にも増していろいろな部のイベントに出席するようになった。夏のOB会(現役との対抗戦)はもとより、現役部員の歓迎コンパや追い出しコンパ、幹部の引継ぎ会、対抗戦、会員の出世祝いや恩師の長寿のお祝いなど。去年は初代OB会長で最古参の「堀先生還暦祝い」も挙行了。イベントの度に学生たちと接し薫陶を述べることにしている。親の説教には耳を貸さない学生たちも運動部の先輩となると別で、親子の差ほどある小生の話にもよく耳を傾けてくれる。毎年みんな素直に成長し追コンではテニスを通じて学んだことの重要性を後輩に強調し、自ら文武両道をやり遂げた充実感と周囲への感謝の気持ちを表現している。参加する度に懐かしくもあり清々しい気分にもなれる。

もしこれを読んだ方のご子息・ご令嬢が大分大学医学部に進学されるようであれば、ぜひとも硬式庭球部への入部を勧める。「人生の道場」への入門である。そして自らは師範を目指して成長し続けて行きたい。

# 乳鉢



## “地域を診る”から“地域づくり”へ

佐伯市医師会 山内 勇人

佐伯保養院の廣瀬就信先生とのご縁で、愛媛県より赴任し、もうすぐ4年になります。佐伯市医師会の先生方には、温かく迎えて頂き感謝しております。私のような未熟者でも地域医療に少しでも貢献できるように精進していく所存です。

私は学生時代の多くを公衆衛生学教室で過ごしました。

“疾病の社会性”を学ぶとともに、仲間達と夏季休暇を利用して僻地に出向き、公民館で寝泊まりしながら、健診、アンケート調査、労働体験などに取り組みました。そこには、診察室や病室では見られない“生活”という現実がありました。高齢化、過疎化、無医地区、貧困、病気・・・様々な問題を抱えながら懸命に生きる人達を包み込む“地域”というものがありました。

「“here and now”だけでなく“before and after”を考えられる医師になれ」と教わりました。“地域”で生まれ育ち、生活を営む中で、病気になり医療機関にかかりますが、再び、“地域”に戻っていきます。だから、「診察室や病室，“いま”“ここ”にいる患者さん」を診るだけでは不十分で、「“ここに来るまで”どのような生活をしていて病気になり、“ここを出た後”どのような生活が待っているのか」を考える必要があること、そして“地域”も合わせて診ていく必要性を教わりました。

内科医時代も、精神科医になっても、この“地域”の概念を持ち続けていますが、3年前の東日本大震災での災害医療支援を通して、“地域”について改めて考える機会を得ました。

避難所でボランティアをする地元の被災した高校生達・・・高齢者が多い中、若者ができることに取り組み、ぼんくらは誰ひとりいませんでした。泥だらけの店内を清掃し、商品の流通に合わせて開店した小さな商店・・・大切なひとに捧げる献花用のお花を店先に並べていました。

金持ちも貧乏人も、企業の規模も関係なく、生き残ったひと、残ったものはすべて地域の財産であり、地域のために「何かできることがないか」を考え、力を合わせて生きている姿がそこにありました。“地域”の底力とその源を感じました。

佐伯に戻った時、精神科医として“地域づくり”に取り組もうと決意しました。「障害者や高齢者が孤立せず安心して暮らせ、誰もが必要とされ生きがいを感じられる、“ハートフルな地域づくり”」に貢献したいと考え、まずは精神疾患の社会啓発活動に取り組んでいます。

中でも、“地域”を肌で感じられる公民館巡りは一番の醍醐味です。



## 課 題

速見郡杵築市医師会 藤原 亨



前号執筆のK先生から携帯に電話があった時、私は空港沖で船釣りをしていました。しかも、ちょうど当たりがあってリールを巻いている時でした。早く釣り上げたいので「了解、了解、引き受けます。」とこのリレー随筆を簡単に引き受けてしまいました。

私は子供の頃より釣り少年でした。25年前に初めて買ったオルソ1世(Orthopaedics: 整形外科より命名。船外機付きのゴムボート)から始まり、オルソ2世(中古の木造モーターボート)、オルソ3世(60馬力の船外機付きフィッシングボート)、現在はオルソ4世(150馬力のフィッシングボート)で大分空港周辺を船釣りしています。今年はまだ初釣りをしていないので、そろそろメバル釣りに行こうと思っていますところです。

私は少年の頃より、船で寝起き(船上生活)をして「日本一周釣り紀行」をしてみたいと夢を見ていましたが適えられそうもありません。一昨年医院旅行で行った四国の「しまなみ海道」から眺めた瀬戸内の島々とその周辺に浮かぶ釣り船の光景が目に焼き付いて忘れられません。せめて、「瀬戸内釣り紀行」ができないだろうかと考えている昨今です。

しかし、現実には楽しいことばかりではありません。仕事以外にも課題を抱えています。一つが母の介護です。父は20年前に70歳で他界し、87歳の母が安岐町で独居生活をしています。私の患者さんで母と同じ87歳で認知症のひどい方がおられます。ご主人は90歳で何とかADLは自立していますが、老夫婦だけの生活が困難になり、息子さんが親の介護のため、家族を東京に残して同居をしています。偶然にも彼と私は同年齢(62歳)で、元々田舎育ちの彼は今の田舎暮らしが気に入っているようで、結構楽しそうに両親の世話をしています。彼に感化されたこともあり、私も母の介護に参加しています。

私の母も数年前より認知症があり、施設入所も考えていますが、なるべく本人の希望に沿って支援をしようと1年前より兄弟で話し合い実行しています。

武蔵町にいる兄と大分市にいる姉と私の三人で交代で母の世話をしています。

私は、週に2日(水、日)実家に泊まり料理もしています。釣り以外に料理も趣味で食事を作ることは、全く苦になりません。後で悔いが残らないように、母との残された日々を大事にしたいと思っています。